

出土している。これは墓壙上に置かれていたものが、木棺の腐朽によって転落したような状態であった。また、同様に幾つかの土壙墓では大小の礫が埋土上層から発見されているが、これは墓の位置を示す「標石」と呼ばれるものである。石製品や金属器は全く出土していない。

甕棺は小児棺と呼ばれる小型のもので三基が確認された。中の二基は二個体を用いた合わせ口甕棺で、一基はすでに抜き取られたものか、単棺であった。上半部は既に失われており、下半のみが残存していた。これも出土遺物はない。

以上の土壙墓・甕棺は混在しており、ほぼ前後して営まれたものと思われ、出土土器も中期前半から半ばと呼ばれる時期に属するものである。

遺跡の性格

以上のように、この遺跡では恐らく縄文時代に使用されたと思われる落とし穴状の土坑、そして弥生前期末から中期初頭ごろの貯蔵穴群など、神手遺跡や川の上遺跡と同様な内容を有しており、これら集落の相互の関係が今後の課題である。先の遺跡と異なる点は中期前半以降に営まれた墓地の存在である。この遺跡のように群集する墓地は卑近な位置で未発見のようであり、ここが墓所として祇川右岸、徳永遺跡群の中で重要な役割を果たしていたといえる。

七 その他の遺跡

発掘調査によってその性格がある程度判明した遺跡以外にも、分布調査などによって弥生時代の遺跡の所在が確認されているものが幾つかある。

若山遺跡

八景山南麓にあつた小さい池の底部に所在した遺跡である。この池は長養池の北西の一部となすものであつたが、県道行橋・山国線（現在の国道四九六号）が建設された際に分断されて池になつていたものと思われる。標高は二九メートル程度である。

池底には黒色土層がみられ、石庖丁が採集されていることから、住居跡の存在も推定される。

馬苦勞遺跡

八景山南側で、甲塚方墳が所在する丘陵の西側鞍部に位置する。標高は二五メートル程度である。太形蛤刃石斧・石鏃などの石器と土器片が採集されている。若山遺跡に隣接することから一連の小集落の存在が予想される。

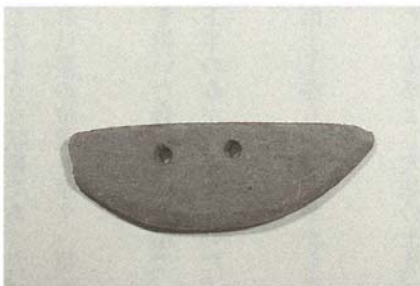
なお、東側の甲塚方墳では墳丘の葺石に板状の石材が多数転用されており、盛り土の下や周辺には墓が存在すると考えられる。また、石庖丁（第38図）や土器片も出土しており、集落の存在も推定される。

新村ノ上遺跡

彦徳甲塚古墳の北西約一五〇メートルで、錦原丘陵上の標高四二メートル程度の西側斜面に位置する。遺跡の存在は町営住宅建設に伴う工事で確認され、約四〇メートル四方の範囲で弥生土器の細片が出土した。当遺跡の南西約一〇〇メートルの沖積平野には今川旧河道があり、湿地帯の水田開発に伴う集落が存在した可能性がある。

長養池南遺跡

長養池西岸の南部に位置する遺跡である。錦原丘陵の東側斜面のやや下位にあたり、池が満水の時には水底に没する。



第38図 甲塚方墳出土石庖丁

長さ約三〇メートルにわたり厚さ約五〇センチメートルの黒色土層が南北に走り、この包含層中から弥生土器片や土師器片・須恵器片が多く出土し、楕円形の自然石の一端を打ち欠いた石錘も採集されている。また、この包含層の上にある畑地からは石斧も採集されており、当遺跡は弥生時代から古墳時代・奈良時代にかけての集落跡と予想される。

丸山遺跡

錦原丘陵が北方で東に分岐した支丘上で、長養池南部中央に張り出した標高約三三メートル前後の丘陵上の広い範囲に所在する。この一帯の町営住宅建設に伴う基礎工事などで表土が削られた際に住居跡群が観察された。削られた地山の断面に、長さ約五メートル、厚さ三〇〜四〇センチメートルの黒褐色土層が断続的に露出し、そのなかに弥生土器片がみられた。この丘陵地は上部平坦面も比較的広く、両側には自然流水による湿地があることから、中規模の集落の存在が考えられる。

尾花原北遺跡

錦原丘陵と国分丘陵の中間にある小丘陵の北方で、町営陸上競技場の西方に位置する墓地である。開墾時に箱式石棺墓が発見されたと伝えられ、転用された石材の一部が残存する。

尾花原南遺跡

県道を挟んで尾花原北遺跡の南側に位置する。畑地の開墾時に太形蛤刃石斧・石庖丁・石鏃などが出土し、弥生土器片・土師器片・須恵器片も散見できる。石庖丁は平面形が外湾刃半月形で、孔が背部近くにつく後期に特有の形態をなす。なお、弥生時代の集落跡が存在するものと考えられる。

山ノ神遺跡

尾花原南遺跡の南方約一〇〇メートルの丘陵上に位置する遺跡である。弥生時代後期の壺・甕・器台のほか石斧・石鏃などが出土しており、住居跡の存在が推定される。

辻ノ後遺跡

国分丘陵北部の舌状台地鞍部に位置し、一部は三国工業所の敷地内になっている。工場の敷地造成の際に、削られた断面に住居跡が露出した。地表下約五〇メートルに厚さ四〇〜五〇メートルの黒色包含層があり、弥生土器片が採集されている。西側を中心とした平坦面上に住居跡や貯蔵穴が分布するものと思われる。また、付近の畑からは須恵器片・土師器片や白磁が出土しており、古墳時代から平安時代にかけても連続する遺跡であろう。

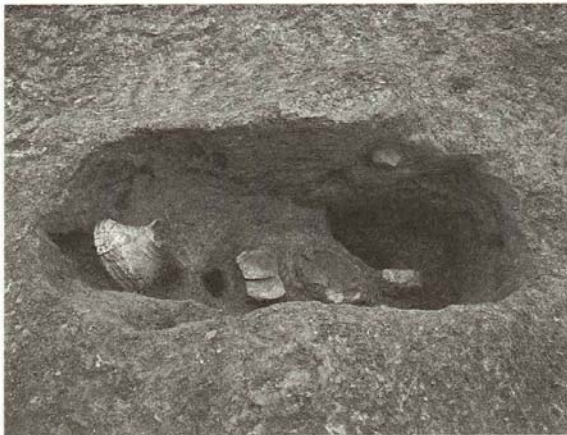
寺屋敷遺跡

豊前国分寺の発掘調査の際に、D区北部で確認された遺跡である。土壙墓かと考えられる長方形の遺構が二基検出され、うち一基からは中期の壺などが出土している（第39図参照）。

荒谷池遺跡

台ヶ原北部にある荒谷池の西岸および池底に所在する遺跡であつて、標高三九メートル前後の位置にある。池水がなくなると露出し、そのときには赤土のなかに遺物を包含する黒色土層が約三〇×二一〇メートルの範囲にみられる。出土遺物は弥生土器片をはじめ黒曜石製の石鏃や石斧・石鍋片がある。

この池の西岸に接する畑地からも石鏃が採集されており、池を臨む西側丘陵上に集落が広がると考えられる。



第39図 寺屋敷遺跡土壙墓

上徳政遺跡

錦陵工業の南方で、丘陵の縁辺部に位置する。標高は五五メートル程度である。弥生土器の甕片と柳葉形の石鏃先端部が出土している。

上坂中村遺跡

圃場整備に伴う上坂廃寺の発掘調査によって、上坂集落の東側沖積平野に分布することが分かった遺跡である。明確な出土遺構は不明であるが、後期の壺・甕・器台・高坏などの弥生土器が多量に発見されている。

巢鳥池遺跡

町役場南東約二五〇メートルにある巢鳥池の西岸の池底にある遺跡である。池水がなくなると、黒褐色土層が南北約三〇メートルにわたって露出し、弥生土器片や須恵器片・土師器片が出土する。錦原丘陵と国分丘陵の分岐点にあたり、両丘陵に挟まれた小谷が北方に延び、弥生時代から長期間断続的に集落が営まれたことが推定される。

平遺跡

国道四九六号が台ヶ原台地の東側斜面に沿って坂になる部分の西側に位置し、標高は六九メートルで、東側に広がる祓川の沖積平野とは約二〇メートルの比高差がある。

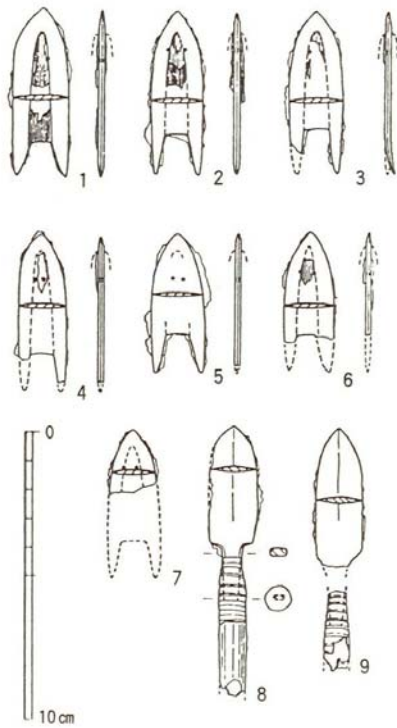
宅地造成中に発見された箱式石棺墓一基が、福岡県教育委員会によって調査された。調査開始時には既に蓋石が取り除かれ、足位側が一部破壊されていた。

遺構は、ほぼ東西方向に主軸をとる、長さ二・五メートル、幅約一メートルの墓壇内に構築された箱式石棺墓である。石棺は長さ一・八八メートルで、幅は頭位で〇・三五メートルを計る。両側壁はともに三枚の石材を使用し、床面にも花崗岩の板石三枚が敷かれている。石棺内面には赤色顔料が塗布されている。頭位の床面には赤色顔料を含む土が一〇センチメートル程度の厚さでみられ、枕があったと考えられている。また、床面のほかの部分でも赤色顔

料を含む土は厚さ五センチ程度あり、遺物も敷石からやや高い位置から出土しており、遺体はこの赤色顔料を含む土層の上に置かれたらしい。なお、側壁上端部には粘土の目張りも施されていた。

遺物は、棺内の枕上面から夔鳳鏡片一面と、九本の鉄鏃がA・B二群に分かれて出土した。夔鳳鏡片は全体の一〇分の一以下の小片で、鏡面を下に向けて出土した。復原すると推定で直径一六センチ程度で、厚さは割れ口で一・八ミリ、縁辺部で四ミリである。図文は平彫りで、彫りが浅く繊細で、現存部は双鳳の相對した部分にあたる。割れ口には磨いた痕跡や手ずれの跡は認められない。鉄鏃のうち、A群は七本からなりすべて平造りの無茎長三角式に属し、基部の挟り込みが深い。長さ四・七センチ、幅一・九センチ、厚さ〇・二センチ前後のものが四点(第40図1〜4)、長さ四・七センチ、幅一・八センチ前後のものが二点(第40図5・6)みられる。これらには先端

から一・一〜一・五センチの部分に矢柄と鏃身を緊縛して固定するために三〜四センチの間隔をおいて、径一ミリ前後の双孔をうがっている。B群の鉄鏃二本(第40図8・9)は茎を持つもので、矢柄も残存して出土している。二本とも同形式のもので、中央部に鏃が通り、断面は菱形に近い



第40図 平遺跡出土鉄鏃

形態をなす。鉄鎌の茎を矢柄に差し込んだ後、桜の皮を巻いて固定している。

当箱式石棺墓は、弥生時代後期末を前後する時期と考えられる。また、この時期の墓地で、埋葬施設に銅鏡を副葬する例は、町内ではほかに徳永川ノ上遺跡の墳丘墓しかなく、被葬者の性格を考えるうえで貴重な資料となっている。なお、一般的にこの時期の墓地は、集団の共同墓地・特定の個人墓に限らず複数の埋葬施設が集中する傾向があり、当遺跡の場合も周辺に墓地が広がるものと推定される。

カワラケ田遺跡

国道一〇号椎田バイパス建設に伴い発掘調査された遺跡で、同バイパスと旧県道椎田・勝山線が立体交差する部分の南方約一五〇メートルに位置する。弥生時代の遺構では、七基の貯蔵穴が検出されているが、うち六基は中期初頭の時期のもので、床面が長方形をなす。七号貯蔵穴は報告書では1号落とし穴状遺構としているものであるが、断面形が袋状をなすことから貯蔵穴と考えられる遺構である。中期後半に属し、床面が隅丸方形をなし、中央部に柱穴を持つ。これらの貯蔵穴を所有した集落は、段丘上位の東側に広がるものと推定される。

国富池遺跡

皆見集落内の国富池西岸中央部斜面に位置する遺跡である。表土層下に厚さ五〇～六〇センチメートルの黒色土層が約五〇メートルにわたって南北に走っており、そのなかに遺物を包含する。遺物は弥生土器の甕や壺の底部などのほかに、土師器片や須恵器片がみられる。遺跡の主体は池の西岸から続く水田や畑地にあると思われる。

中尾遺跡

当遺跡は下原集落西方の祓川右岸段丘上にある。祓川河川敷より約七メートル高く、東側の段丘上面からは一〇メートル程度低くなっている。昭和五十五年一月にこの一帯の圃場整備に伴い、

水田の耕作土下から発見された遺跡である。東西約五〇メートル、南北約二〇〇メートルにわたって住居跡や貯蔵穴・掘立柱建物と思われる円形や不整形の黒色土が観察され、中に遺物を包含していた。遺物は甑こしなどの弥生土器片のほかには須恵器片・土師器片があり、土錘・石庖丁・紡錘車なども出土している。遺跡の規模と遺物からみて、当遺跡は弥生時代中期・後期ごろから大規模な集落が発達し、古墳時代においても継続して営まれた集落跡と考えられる。

平塚遺跡

祓川東岸の洪積台地上で、上原集落の南東約一〇〇メートルの墓地内にある箱式石棺墓である。この部分の標高は五七メートルで、西側の沖積平野とは約一六メートルの比高差がある。現在、当石棺墓は破壊が進んでいるが、昭和三十年代には蓋石が除去された形で旧態をとどめ、内面には全面に赤色顔料が塗布されていた。石材は壁石・蓋石とも厚みのある花崗岩で、全体として比較的大型の箱式石棺墓であった。この一帯にはなお同時期の埋葬施設が存在する可能性がある。

頭無池遺跡

吉岡集落南方の頭無池の南岸中央部や池にやや突き出ている部分の先端部に所在する遺跡である。池水が干上ると遺物を包含する黒色土層が露出する。遺物はサヌカイトの石鏃やチップのほかには弥生土器片がある。南方の長峯山から流出する谷川に沿って住居跡の存在が推定される。

大正池遺跡

光富集落西方の大正池西岸の池底にある遺跡である。弥生土器片と紡錘車が採集されている。北東部に開ける沖積平野を生産地とした集落が営まれていたと考えられる。

黒坪遺跡

光富集落西方の祓川左岸の標高五二メートル前後に位置する遺跡である。圃場整備で耕作土が除去された際に直径約五〜六メートルの円形の黒褐色土が点々と観察され、なかに弥生時代後期の

土器片が含まれていた。数軒の住居跡からなる集落が存在する。

羽熊遺跡

大字節丸の北垣遺跡の南方で、犀川町との境界付近に位置する遺跡である。標高九五メートル前後の丘陵東側斜面に分布する中期の集落跡で、東側の沖積平野とは約三〇メートルの比高差がある。国道四九六号バイパス建設に伴う調査として、福岡県教育庁京築教育事務所が平成六年七月から九月にかけて約一二〇〇平方メートルを発掘した。

主な遺構としては、竪穴住居跡五軒・貯蔵穴約一〇〇基がある。遺物は弥生土器のほか石斧や石庖丁・石鏃などがある。石鏃には姫島産黒曜石製で、長さ四・二センチメートル、幅二・六センチメートル、重さ約四・八グラムの大形品がある。

これらの遺跡以外にも、町内には二月谷台地西端の二月谷遺跡では太形蛤刃石斧が採集されており、峰高寺の北東約二〇〇メートルの僧師塚遺跡周辺でも扁平片刃石斧が採集されている。